

自由廃業運動と救世軍の日英関係

林 葉 子

本稿では、自由廃業運動の初期の頃の救世軍の日英関係に着目し、同運動における意思決定の経緯や役割分担について明らかにするため、イギリスの救世軍万国本営が発行していた4つの機関誌の日本関係記事を日本側の史料と照らし合わせて検証した。イギリスから来日した救世軍の司令官が日本での婦人救済所設置を決めた歴史的背景として、同司令官が来日前に深く関与したセイロン島では、すでに救世軍が婦人救済所を設置していたことを明らかにした。

はじめに

日本での廃娼運動を初期の頃から率いていた島田三郎は、1900年2月の講演の中で、公娼制度下の娼妓が置かれた状況に言及し「もしこれが奴隷でなければ、他にどんな奴隷がいらっしゃいますか。いかに考えても、これは純然たる奴隷であると私は思います⁽¹⁾」と述べている。当時、日本全国のほとんどの府県に設置されていた公娼地域としての遊廓で、娼家からの脱出を試みる娼妓が続出し、それを各地の新聞が事件として頻繁に報じていた。そうした娼妓たちの廃業を支援する自由廃業運動が救世軍の関与によって本格化するの、同年の夏のことである。

日本の知識人の間では、すでに1870年代から公娼制度批判の廃娼論が唱えられ始めていたが、その影響が及ぶ範囲は長らく限定的であった。しかし1899年

に始まった自由廃業運動では、遊廓から逃げ出す娼妓たちが市井の人々の目の前で救助され、さらにその様子が、大新聞だけでなく小新聞でも報じられることになったため、幅広い階層の人々の関心を集めた。そのような新聞報道を通じて、遊廓がいかに女性たちにとって過酷な場であるかが示されると同時に、そこから脱出したいと願う女性たちを助けようとする人々の存在が可視化された。この自由廃業運動が展開されていく過程で、救済者として英雄視されると同時に、公娼制度を擁護したい人々からの攻撃の標的になったのは、キリスト教の一派である救世軍のクリスチャンであった。⁽²⁾

自由廃業運動が注目されたもう一つの理由は、そこに外国人が関与していたことである。救世軍の場合、イギリスから来日した士官たちが日本人と一緒に街頭で活動した。自由廃業運動の国際性が、そのように目に見える形で示されたことは、当時の一般庶民の関心を高めただけでなく、それに対応する日本政府の側にも、日本における公娼制度の存廃問題が国際的なイシューであることを意識させ、緊張感を生んだ。特に日本政府がキリスト教の宣教師やクリスチャンを警戒したのは、彼らと遊廓関係者との対立が、外交関係に悪影響を及ぼすことを恐れていたからである。⁽³⁾しかし、日本における自由廃業運動に、実際のところイギリスの救世軍万国本営（The Salvation Army International Headquarters、以下、イギリス救世軍と略記）がどの程度関与していたのかという点については、これまで検証されてこなかった。

本稿は、自由廃業運動開始前後の救世軍における日英関係に着目し、運動内部での意思決定や役割分担について、日英双方の史料から明らかにしようとするものである。救世軍が日本で最初の宣教の拠点を東京に置いたのは1895年のことであるが、日本以外でも、救世軍が活動を始めた国々では、イギリス救世軍からの情報がそれぞれの国の「本営」（Headquarters）に伝えられていた。そのイギリス救世軍の主な機関誌は、『ウォー・クライ』（ときのこえ）、『オール・ザ・ワールド』（全世界）、『デリヴァラー』（救済者）、『オフィサー』（士

官)の4誌である。⁽⁴⁾それらの史料は現在、イギリス・ロンドンの救世軍国際遺産センター(The Salvation Army International Heritage Centre)で閲覧することができる。本稿は、それらのうち主に1895年から1910年までに刊行されたものを用い、特に自由廃業運動の初期の1899~1900年前後を中心に、日本側の『ときのこゑ』等の救世軍関係史料と照らし合わせて検証した。4誌のうち特に重視したのは『オール・ザ・ワールド』である。それは1884年11月に創刊された月刊誌で、国際的な救世軍の活動を知らせるための広報誌であり、後述するように、そこには日本の自由廃業運動についての記事も掲載された。そうした記事を通じて、日本における公娼制度の存廃問題は海外でも広く知られることになったのである。

I 国際的廃娼運動の中の自由廃業運動

近代日本の公娼制度に対しては、国内のみならず海外からも廃止を求める様々な働きかけがあったが、自由廃業運動は、日本国内で展開された国際的廃娼運動の最も初期の事例である。それは、メソジストの宣教師であるアメリカ出身のユリシーズ・グラント・マーフィー(Ulysses Grant Murphy、以下、マーフィと略記)⁽⁵⁾が日本人弁護士とともに始めた娼妓たちの廃業支援の法廷闘争を起点とし、イギリスに万国本営を置く救世軍の直接的・組織的な関与によってその支援活動の方法が多様化し、やがて全国的に展開されることになった⁽⁶⁾。

日本の自由廃業運動に救世軍が関与し始める直前にイギリス救世軍から日本へ司令官として送り出されたのは、ヘンリー・ブラード(Henry Bullard)である。彼は来日前、イギリス救世軍の海外進出の最重要拠点であるインドのボンベイで拠点形成に携わっていた。『オール・ザ・ワールド』の創刊号には、インド、フランス、アメリカ合衆国およびカナダ、スウェーデン、オーストラリア、南アフリカの順に活動紹介の記事が掲載されており、インドが最初に紹

介されていることから、特にインドでの救世軍の活動が重視されていたことがわかる。初期の『オール・ザ・ワールド』にはインド関係の挿絵も多く、インドへの関心の高さが見て取れる。そしてそのインドについての最初の記事に、ブラードの名前が士官の一人として記されているのである。⁽⁷⁾

イギリス救世軍からのそのような経験豊富な士官が日本へ派遣された事実から、当時、日本進出がいかに重要なこととして位置付けられていたかがわかる。ブラードの来日前に日本で最初の大佐として活動したイギリス人のエドワード・ライト (Edward Wright) も、ニュージーランドでの救世軍の拠点づくりに携わった経験を持っていた。⁽⁸⁾ 彼らの日本での活動は、そのようなイギリス帝国の植民地における経験を踏まえて実施されたものであった。

日本では、廃娼運動自体はすでに1880年頃から群馬の県会で始まっており、1886年に結成された東京婦人矯風会は女性の立場から廃娼を求めていた。この矯風会は設立当初、世界女性キリスト者禁酒同盟 World Woman's Christian Temperance Union (以下、WWCTU と略記) の日本支部として位置づけられていた⁽⁹⁾ので、矯風会の活動は、日本で最初の国際的な連携に基づく女性運動であったといえる。ただし WWCTU の活動は禁酒 (Temperance) 運動に重点を置いていたので、WWCTU の日本への関与も、19世紀末の時点では、主に飲酒問題に焦点を当てたものだった。日本では、矯風会の創設後まもなく、その日本における活動の中心を禁酒運動と廃娼運動のどちらに置くかという点をめぐって内部的な対立が生じ、自由廃業運動が始まる頃には、矯風会内では禁酒運動派が優位⁽¹⁰⁾になっていた。

しかし、そのような時期の矯風会メンバーに対し、再び公娼制度の問題に目を向けさせ、その関心の高まりを自由廃業運動への支援活動に結びつけたのが、矯風会の評議員の一人であった佐藤機恵子である。自由廃業運動が救世軍によって広く全国展開される約1年前の1899年6月、彼女は山室軍平と結婚して山室機恵子となり、夫婦とともに日本の救世軍を率いることになった。矯風会と

救世軍とは、それぞれに独自の国際的なネットワークを形成しつつあったが、山室機恵子は両者の接点となったのである。自由廃業運動は、そのようにして、日本、イギリス、アメリカと、その植民地とに広がるキリスト者の人的ネットワークに結びついて日本国内で展開されることになった。

日本の先行研究においては、自由廃業運動をめぐる国際関係に目が向けられること自体が少なく、自由廃業運動の担い手として重視されてきた救世軍については、日本側の日本語史料のみに基づいて論じられてきた。しかし、救世軍が、組織の形態として軍隊を模倣し、その『軍令及軍律 兵士の巻』の中では「兵士は快く其上官の命に服従せざる可らず」と定めてトップダウン型の組織であることを明示している点を鑑みれば、自由廃業運動の歴史的な評価にあたっては、まず、イギリス救世軍と「日本本営」の間での命令／服従の関係が、どの程度の範囲に及んでいたかを検証することが必要だと考えられる。自由廃業運動に関する救世軍の活動のうち、イギリス救世軍の指示に基づく活動と、日本人が主導した側面とを、切り分けて把握したい。

救世軍側の歴史解釈、とりわけ英語で執筆された記録には、イギリス救世軍の貢献度の高さが強調されている。1900年夏の時点で救世軍日本本営の大佐だったブラードが、公娼制度の実態を徹底的に研究した後に自由廃業運動の開始時期を決めたかのように記しているイギリス救世軍側の記述もある⁽¹³⁾。

こうしたイギリス救世軍の自由廃業運動への関与は、イギリス救世軍全体の海外活動についての歴史記述においても、特に重視されたテーマの一つである。たとえば、1928年にイギリス救世軍が刊行した救世軍史の概説書では、日本における買売春問題への働きかけは、彼らの国際的なソーシャルワークの活動の中で最も重要なものの一つとして位置付けられている。そこでは、救世軍のソーシャルワークの歴史が(1)と(2)に分けて記載されているが、(1)の項目として挙げられたのは、安い食品の提供、出獄人救済所、婦人救済所、妊産婦のためのホーム、児童ホーム、夜間活動（少女たちの売春を予防するための夜間パトロ

ール)、スラムでの活動、カナダにおける女性飲酒者用ホーム、自殺予防局、『最暗黒の英国とその出路』であり、(2)の項目は、イギリスにおける廓清運動、日本における廓清運動、インドの「犯罪部族」(に対する活動)、ジャワ島におけるハンセン病患者の救済⁽¹⁴⁾である。こうしてイギリス救世軍の海外活動の歴史の中でも代表的なものとして、性的な問題に関しては日本での廓清運動(The Purity Agitation)だけが挙げられていることから、当時の日本は、世界中で廓清運動を最も必要としている国だと救世軍に捉えられ、それが実際に取り組まれていたことがわかる。

イギリス救世軍側の記録を踏まえて2006年に刊行された『救世軍歴史事典』では、自由廃業運動について「救世軍は公娼制度にも戦いを挑んだ。勇気ある救世軍の兵士たちが、危険な遊廓へ足を踏み入れ、『ときのこゑ』の娼妓救済号を配った。このことが騒乱を引き起こし、イギリス人士官のデュースや山室軍平らは深刻な傷を負わされることになった。しかしこうした彼らの行動の結果、売春に関わる新しい法律が制定、施行された。また、救世軍の存在は可視化⁽¹⁵⁾され、人々に広く知られ、尊敬されるようになった」と説明されている。

そのように救世軍の自由廃業運動への関与を、遊廓へ『ときのこゑ』を配りにいった行動として狭く限定的に理解するならば、その活動開始の意思決定は、大佐であるブロードが行なったと見做すことはできる。たしかに救世軍は、日本各地の遊廓で、自由廃業の方法を示した『ときのこゑ』を配布し、自由廃業のための手続きもサポートした。そのような情報拡散や援助活動は、遊廓側にとって都合の悪いことだったので、遊廓やその近辺では救世軍人に対する暴行事件が頻発し、日本各地の新聞ではそれらに焦点を当てた記事が連日のように掲載されていた。【図1】はその暴行事件の様子を表した象徴的なイラストで、イギリス救世軍の機関誌の一つである『デリヴァラー』に掲載されたものである。このようなイラストに描かれる救世軍人はすべて男性で、彼らが自由廃業支援のために遊廓めざして「行軍」し、遊廓の近辺で楼主らが雇った「破落戸^{ごろつき}」



【図1】‘Raising the Womanhood of Japan’, *The Deliverer*, January 1901, p. 122.

に襲撃される様子に焦点が当てられている。⁽¹⁶⁾ 1900年の夏以降に自由廃業運動のイメージとして日本の新聞各紙で強調されてきたのも、このような、勇気ある男性たちがかわいそうな女性たちを助けにいった、という構図である。

しかし、救世軍が遊廓関係者から暴行されることは、自由廃業運動の開始時点から始まったわけではなかったことが、イギリス救世軍側の史料から確認できる。救世軍に対しては、すでに1895年の来日直後から、遊廓以外の場所でも投石されることがあった。特に

遊廓周辺で楼主らの利害に抵触する活動を行った際には、楼主らが、ありとあらゆる暴力的手段を用いて救世軍人たちを排除しようとした。⁽¹⁷⁾ そのような救世軍に対する攻撃が激しかった横浜では、抵抗した救世軍士官が男性ではなく、イニー・ニューカム (Inie Newcombe) という女性士官だったことも記録として残されている。⁽¹⁸⁾ 自由廃業運動が開始されるよりずっと前に救世軍が遊廓近辺での伝道を行っていたことについては、日本側の史料にも記録が残されている。1897年1月に発行された『^{とぎのこゑ} 閨聲』には、「其遊廓附近で開戦した時には遊女其他の閨声を買うたものも少なからずあった」と記されている。⁽¹⁹⁾ また、同年5月の『閨聲』の記事からは、彼らの「開戦」が公娼地域のみで行われたわけではなかったこともわかる。そこには、日本人の大尉が「町外れの寺院などに災難を避けて居る人々の間に頗る風俗の頹廢する恐がある」との噂を聞き「日夜に警醒の聲を揚げ」たと記されている。⁽²⁰⁾

救世軍による買売春批判や遊廓における伝道を、自由廃業運動と同一視する

ならば、なぜ、突如、1899年から1900年にかけて、その運動が全国的な関心を集めることになったのかということが説明できない。また、遊廓での救世軍人に対する暴行事件や、それに怯まぬ救世軍の男たちの勇気や信仰の強さばかりに注目すると、自由廃業運動が、イギリス救世軍ばかりではなく、前述のアメリカ人宣教師・マーフィや、WWCTUとも連携して行われた国際的社会運動であった側面が見えなくなってしまう。自由廃業運動の本質を捉えるためには、イギリス救世軍の日本における活動のうち、何が固有の貢献であったかを正確に評価し、その活動を国際的廃娼運動のネットワークの歴史の中に位置づける必要がある。

結論を先取りして言えば、イギリス救世軍が独自に行ったこととして重視されるべきことは、日本での婦人救済所開設の決定である。後述するように、遊廓側との衝突事件への関与はイギリス人でなくても可能であったが、廃業後の娼妓を含め、性的な問題に悩む女性たちの生活再建のための場所作りについて、イギリス救世軍は世界各地での豊富な経験を持っていた。以下では、そのイギリス救世軍が日本人女性をどのように捉え、日本の買売春問題にどのように関与しようとしたのかを具体的に検証する。

II 自由廃業運動以前のイギリス救世軍における日本人女性のイメージ

自由廃業運動が誰によって主導され、結果的にどの程度の効果を生み出し得たかを検証するにあたっては、自由廃業運動の開始前にイギリス救世軍がどのように日本人女性を捉えていたかを把握する必要がある。日本における近代公娼制度は複雑なシステムであり、イギリスのそれとは相違点が多い。その成立の背後には、当時の日本社会に固有の女性観や家族観の問題があった。したがって、日本の公娼制度を無効化するための戦略を立てるには、公娼制度の仕組みだけでなく、日本の家父長制と、その下での女性たちの社会的地位の実態に

ついて理解することが必須であった。

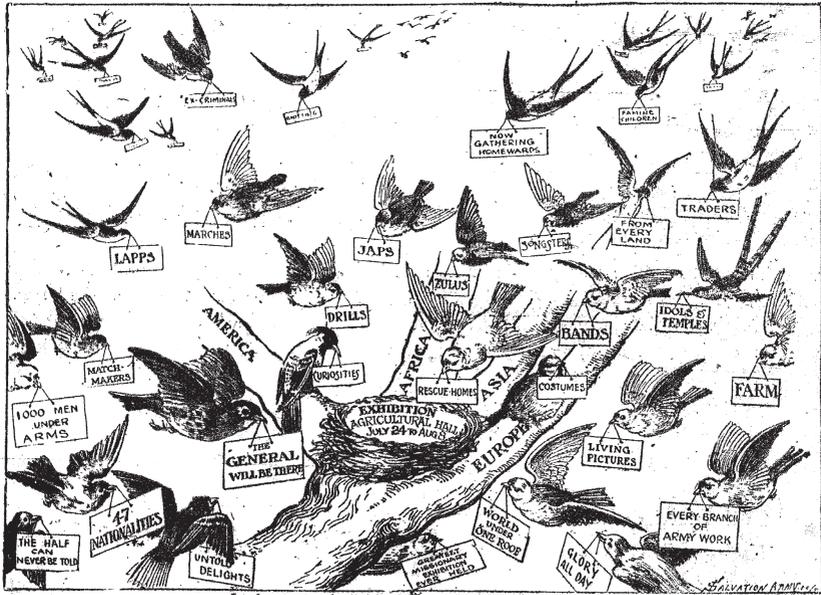
「自由廃業」をめぐる法廷闘争の中で、マーフィ側の主張の論点は複数あるが、その主要なものとしては、娼妓が「稼業」であるにもかかわらず「廃業」が認められないのは矛盾しているということと、娼妓に前借金があっても遊廓に拘束される理由にはならないということが挙げられる。また、娼妓の抱える前借金とは、多くの場合、親権者の借金を娘の売春によって返済するものであることから、そのような娘の身売りを親孝行の美談として正当化する日本の親子関係のあり方が問われていた。なぜ、日本の娘たちが親のために身を売り、売られた先の遊廓でほとんど抵抗もせずに楼主に従い、それらの関係性から逃げ出すことが困難なのかということは、単に法制度だけの問題ではなく、日本における女性観や家族観の問題でもあった。

イギリス救世軍は、自由廃業運動の開始時点で、日本文化に対して強い関心を示していたものの、その理解は表層的なものにとどまっていた。当時のイギリス救世軍が抱いていた日本のイメージや、日本文化の理解の程度は、1899年7月24日から同年8月8日にかけて開催された救世軍博覧会（The Salvation Army Exhibition）における日本文化の扱いとその報道内容に示されている。

その救世軍博覧会は、ロンドンのイズリントンにあった農業会館（The Agricultural Hall）で開催された。同じ会場で1896年に初めて開催された第1回目に続く第2回目の博覧会として、前回と同様に、救世軍の活動紹介が行われた。たとえば、酒飲みや娼婦、貧者が集まるスラムの様子などが示されると同時に、救世軍がどのようにそのような人々の救済を行なっているかを見せる場が設けられた⁽²¹⁾。この博覧会が最もアピールしている点は「素晴らしい展示」である。この博覧会は、「(世界各国の)国民性についての教育 (An Education in Nationalities)」の場としても位置付けられており、イギリス本国での救世軍の活動だけでなく、スカンディナヴィア、ヨーロッパ大陸、ブルー王国、南アフリカ、インド、セイロンなどについての紹介コーナーがあり、様々な民

族のマナー、習慣、民族衣装などについての展示を見ることができた。ラップランドの人々の帽子、アフリカで使われる動物用の囲い、スイスのシャレー、オランダのポートハウスなどとともに、日本の茶屋 (The Japanese Tea-house) も展示されていた。⁽²³⁾

この救世軍博覧会には日本からの代表は派遣されていないが、日本は、特に注目されるべき国と位置付けられていた。それがわかりやすく示されているのは『ウォー・クライ』に掲載された【図2】のイラストである。救世軍博覧会を表す鳥の巣が、ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカと枝が広がる木の幹の中心に描かれ、そこに数々の鳥たちが、博覧会で最も注目すべき事柄 (The Matter) の札を集めてくる構図である。その最も目立つ中央部に、「日本人 (JAPS)」と記された札がある。“Jap”は現在、蔑称として使われるが、当時のイギリス救世軍の機関誌では、必ずしも否定的な評価を伴わない文面に



【図2】 'The Birds of the Air Shall Tell the Matter',
The War Cry, 24 June 1899, p. 16.



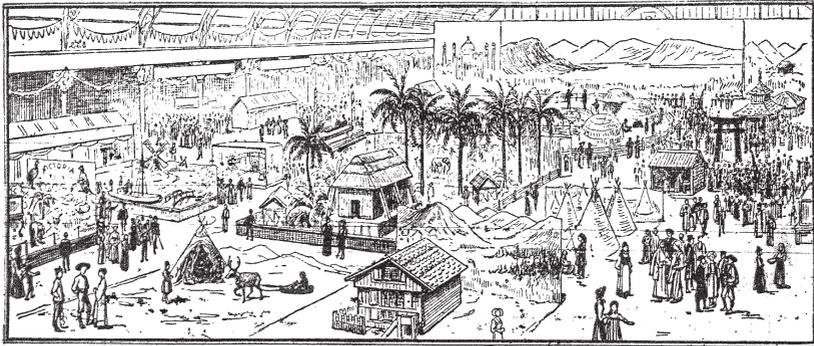
【図3】 *The War Cry*, 22 July 1899.

において、日本人を“Jap”または“Japs”と表記している記事を見出すことができる。⁽²⁵⁾

さらに、救世軍博覧会直前の『ウォー・クライ』の表紙絵には、博覧会での日本の展示をテーマとするイラストが掲載された（1899年7月22日号）【図3】。中央の絵には「あの最も魅力的な片隅の、日本のティーガーデン」というキャプションが付けられ、それを取り囲む枠に描かれた多様な人々が一斉にその日本の展示に注目しているという構図になっている。日本の茶屋は、ヤシの木を背景に提灯のぶら下がった奇妙な小屋とし

て表現され、そこで和傘や扇子を持った着物姿の女性たちが客待ちをしているというイラストである。『ウォー・クライ』によれば、この小屋では、「魅力的でオリエンタルな景色」の中で、「ミッシヨナリー・ティー（Missionary Tea）」のパックを購入した人ならば誰でも、静かに座って無料で一杯のお茶とビスケットを楽しむことができる、とのことであった。⁽²⁶⁾

同じ展示会場には、日本の茶店の他にも、インドの村、ラップランドのテント、ココヤシを建材とする小屋、ノルウェーのコテージ、金鉾等を模したものがあつた。⁽²⁷⁾ それらの展示の全体図【図4】を見ると、日本の茶店の前には、鳥居のようなものが建てられていたこともわかる。このような「珍しいもの（Curiosities）」や「目を見張らせるもの（The Spectacular）」を並べる展示



A CORNER OF THE FOREIGN SECTION IN THE FORTHCOMING EXHIBITION.

【図4】 'A Corner of the Foreign Section in the Forthcoming Exhibition'
The War Cry, July 15, 1899, p. 6.

の在り方から、同博覧会は、異国の宗教や文化を正確に伝えることよりも、人々の好奇心に訴えることによって来場者の数を増やすことの方を重視していたのではないかと考えられる。



【図5】 'Stalking Commissioner Howard with a Camera at the International Exhibition',
All the World, October 1899, p. 532.

この博覧会では、女性が低く身を屈めて日本風に挨拶 (Salutation) する様子も展示された【図5】。そのような日本人女性の姿勢はイギリス救世軍の人々にとって特に印象深かったようで、【図5】の女性の姿に類似する写真やイラストは、博覧会関係の記事だけでなく、日本を紹介する他の記事でも使用されている。⁽²⁸⁾

低く身を屈める日本人女性の姿勢は日本のジェンダー文化を反映した事象であるが、イギリス救世軍の機関誌はそれを日本人の「礼儀正しき」の象徴と見なして、着物姿の日本人女性の写真やイラストを多用した。



【図6】 'In All Lands', *All the World*, January 1902, p. 55.

そのように男性ではなく女性の写真やイラストを用いる傾向は、日本以外の国についての記事には見られない。同じ東アジアでも、中国や朝鮮等についての記事に添えられる写真やイラストは男性のものが多かった。たとえば【図6】は、海外の救世軍の動向を報じる欄に添えられたイラストで、右端に着物姿の日本人女性が描かれているが、それぞれに民族衣装を身につけた他の人々のイラストは、むしろ男性を表したもののほうが多い。

日本人女性のイラストや写真の多用は、イギリス救世軍の日本人女性に対する高い評価の反映だと考えられる。日本に来日した救世軍士官の中には、インドや中国での宣教経験を持つ者もいたが、そのインドや中国と比較して、日本における女性の在り方について『オール・ザ・ワールド』は「私たちの目から見れば、日本人の道德観はまだ低い⁽²⁹⁾が、実際のところ、日本人女性たちは、同じような抑圧のもとに置かれているインドや中国の姉妹たちよりも、はるかに優れているのである」と述べている。

しかしそのような日本人女性への賞賛が、日本文化の正確な理解に基づくものであったかどうかは疑わしい。むしろ、日本人女性の着物姿を単に珍しく美しいものと捉え、その写真やイラストをアイ・キャッチャーとして用いていただけではないかとも考えられるのである。

この点に関して特に注目すべきことは、イギリス救世軍の機関誌において、日本のシンボルとして娼妓や芸妓のイメージが用いられている点である。【図7】は、1897年にイギリス救世軍の『オール・ザ・ワールド』に掲載された

「日本からの声 (Voices from Japan)」と題された記事のタイトルに添えられたイラストである。

この記事には遊廓や公娼制度についての言及は一切なく、イギリス人士官が日本語を修得することの困難について論じたも

のであった。⁽³⁰⁾ 海外に派遣されたイギリス人士官にとって、そのような言語の壁は新しい派遣地では必ず遭遇する問題であり、前述の女性士官・ニューカムの手紙に、日本語は「中国語と同様に、非常に難しい」と記されていたことが紹介されている。⁽³¹⁾ しかしそのような記事内容とは無関係の【図7】の挿絵では、着物姿の女性が頭髮に複数の簪や笄を挿しており、それが遊女の後ろ姿を描いたものであることは明らかである。救世軍がそれまで一貫して性の売買に反対する姿勢を明確に打ち出していたことから推測して、イギリス救世軍は、このイラストが娼婦を意味するものであることを知らずに用いたのだと考えられる。

イギリス救世軍が日本関係の記事の中で用いた写真やイラストには、横浜写真として知られるものに類似する構図が多いことから、⁽³²⁾ それらは救世軍独自の取材に基づくものではなく、すでにイギリスで流通していた土産物の写真や絵葉書等の流用である可能性がある。しかしそれが流用であると否にかかわらず、こうした遊女のイラストを、公娼制度とは全く関係のない記事に使用している事実からは、日本における公娼制度や娼妓について、当時のイギリス救世軍がほとんど知識を持っていなかったのではないかと推測されるのである。

前述のように自由廃業運動は、単なる買売春批判ではなく、日本の近代公娼制度の矛盾を逆手に取った法廷闘争として1899年に始まった。そのため「自由

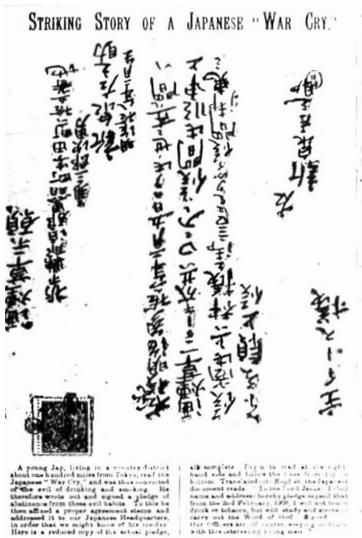


【図7】 'Voices from Japan', *All the World*, October 1897, p. 466.

「廃業 (Free Cessation)」という言葉は、それ以前から続く廃娼運動の中に位置付けられながらも、それまでには見られなかった新しい戦略を意味する新語として重要な意味を持っていた。しかしイギリス救世軍の機関誌の中で最初に“Free Cessation”という言葉が記事中に用いられたのは、ようやく1903年になってからのことである。しかも、『オール・ザ・ワールド』では独自の取材ができなかったためか、法廷闘争の戦略を練ったマーフィー自身に寄稿させる形でそれを解説している⁽³³⁾。

また、日本の遊廓や自由廃業運動について紹介した記事には、誤記も見られる。1906年5月の『オール・ザ・ワールド』に掲載された「日本の娘たち (Daughters of Japan)」という記事では、吉原遊廓を複数回にわたって“Yoshiwari”と誤って記しており、同誌の編集部には日本の遊廓についての正確な情報が伝わっていなかった可能性が高い⁽³⁴⁾。

そのように日本についての情報不足と、それゆえの誤解を生み出した最大の原因は、イギリスの救世軍人にとっての日本語修得の難しさであった。1895年に日本に最初に派遣されたイギリス人士官の一人であるパウエルは、来日後に、ようやくひらがなを学びはじめたことが記録に残されている⁽³⁵⁾。しかも、彼らは一つの国に長く派遣されるのではなく、国境を超える移動を繰り返しており、前述の士官のニューカムも、イギリス本国からインド、中国へと活動拠点を移した後に来日したが、新しい派遣地へ移るたびに新しい言語を修得しなければならなかった⁽³⁶⁾。自由廃業運動関連の記事に限らず、イギリス救世軍の日本関係記事には日本語の発音の誤記がたびたび見られるが、【図8】のように、日本語の手紙が逆さに掲載されたものまであり、これが掲載された1903年の時点においても、イギリス救世軍の機関誌編集者の中に日本語を理解する人がいたかどうか疑わしい。同記事には「悪夢」のように難しい日本語、という表現があり⁽³⁷⁾、そのような言語の壁が、イギリス救世軍の日本の自由廃業運動への関与を限定的な範囲にとどめていたと考えられるのである。当時のイギリス救世軍は、



【図 8】‘Striking Story of a Japanese “War Cry”’, *The War Cry*, May 16, 1903, p. 6.

日本の法や政治、文化や経済について独自に取材したり、日本各地のローカルな情報に基づく確かな指示を出したりするだけの力は持っていなかったと考えられる。

そのことはすなわち、自由廃業運動の際の救世軍と遊廓とのやりとりが、イギリスからの指令に従った活動ではなく、それぞれの現場における日本の救世軍人たちの判断に基づく行動であったということを意味している。自由廃業運動が最初に注目を集めた1900年の夏に、『オール・ザ・ワールド』は、山室軍平と山室機恵子の率いる日本の東京第4小隊を「自立した日本の軍営 (A Self-supporting Japanese Corps)」と

高く評価している。⁽³⁸⁾ 一部であれ、そのように日本の救世軍の中でイギリス救世軍から自立して活動しようとする動きが生まれたことは、日本の状況を十分に把握しきれないイギリス救世軍との関係においては必然的なことであり、そのような自立の動きを、イギリス救世軍側も肯定的に捉えていたのである。

III 廃業後を支援する婦人救済所の形成

日本における廃娼運動史を概観する時に、女性解放という点でイギリス救世軍が日本で成した最大の貢献は婦人救済所の設立であったと本稿では捉えている。これまで自由廃業運動が語られる時にしばしば焦点化されてきたような、楼主らの横暴なふるまいに抗する闘争の場においては、イギリス人から来日した救世軍人の存在が日本の警察官に警戒心を強めさせることはあっても、彼ら

の日本語運用能力の問題が障壁となり、イギリス救世軍から日本の救世軍人に具体的な指示を出すことは難しかったと考えられる。しかし、廃業した娼妓たちがそれまで暮らしていた遊廓から出た時に即座に必要な住まいの問題や、生活費のため新たな仕事を得る手段の問題については、婦人救済所という解決策をイギリスの救世軍人はすでに編み出していた。そして、イギリス本国以外でも同様の救済所を創設する経験を有していたのである。

1900年7月の日本における救世軍の婦人救済所の開設が、ブラードの指示によるものであることは、『デリヴァラー』に掲載された記事から確認できる。その記事は1900年9月に掲載されており、婦人救済所が開設された直後に東京の日本本営からイギリス救世軍へ送られた情報に基づいていることがわかる。その記事は、イギリス人士官のマチルダ・ハッチャー (Matilda Hatcher) からの手紙を引用する形で構成されたものである。彼女の手紙には、「あなたがた (読者) はブラード大佐がここ (東京) に救済所を開いたことを喜んでくれるでしょう。日本におけるこの少女たちのあまりに惨めな状態は、言葉で言い表すことができません。(日本では) 娼家が公認されていて、その犠牲者たちの哀れむべき姿は、イングランドでならば、とても見るに堪えないでしょう」⁽³⁹⁾ (文中の括弧内は筆者による補足) と記されている。

イギリス本国で最初に救世軍の婦人救済所 (The Rescue Home for Women) が設立されたのは、1883年のグラスゴーでのことである。⁽⁴⁰⁾ 1884年には、オーストラリアのメルボルンに2つ目の婦人救済所が設立されている。⁽⁴¹⁾ 1885年にフランスのニーム、1886年にカナダのトロント、同年に南アフリカのケープタウンでも同様の救済所が設立された。⁽⁴²⁾

アジアで救世軍の婦人救済所の設置が最も早かったのは、セイロン島である。19世紀末に、インドの救世軍は4つの管轄地域 (Commands) に分割されていたが、ブラードは、それら4つをイギリス救世軍代表として結びつける現地の連絡役 (A Resident Travelling Secretary) の初代の担当者になった。⁽⁴³⁾ 当時

のそのインドの4つの管轄地域とは、北インド、北西の州、南インド、セイロンである。⁽⁴⁴⁾セイロンには、救世軍によるアジアで最初の女性用の救済所が設立されたが⁽⁴⁵⁾【図9】、1890年7月の『デリヴァラー』には、そのセイロン島のコロンボにおける救済活動(The Rescue Work)についてのレポートが掲載されている。



【図9】‘Ceylon Rescue Work: A Letter from the Major’, *The Deliverer*, July 1890, p. 13.

その記事には、次のように書かれている。——コロンボは、4～5ヶ月前には買売春による悪の巣窟のような場所であった。11歳や12歳の少女が村から連れてこられて娼家に売られていた。船員や軍人に加え、役人までもが、この犯罪的行為に関わっていた。救世軍がそこに入り込むまでは、かわいそうな少女たちに手を差し伸べる者はいなかった。4ヶ月前に救世軍が救済所を開くと、すべての階層の人たちから関心が寄せられた。新聞がそれを報じて警察を動かし、その結果、コロンボにあった50の娼家は、今、閉鎖されている。日本人やフランス人やドイツ人の女性たちは、他の街へ送られていった。たくさんのシンハラ人の少女たちは、彼女らの友達のところや村へ戻ったり、他の生活を始めたりした。そしてまだ、これから新生活へ向かおうとしているたくさんの少女たちがいる。救済所には約40人の少女たちがいるが、彼女たちは縫い物をしたり、バスケットやマットを作ったりして働いている。彼女たちがそこに暮らし、働くために、これからもっと大きな家を確保しなければならない。死よりも酷い境遇からかわいそうな少女たちを助け出すために、そして出獄人救済所

のためにも、『デリヴァラー』の読者に寄付をお願いしたい。⁽⁴⁶⁾ ——

この記事で報告されたコロンボでの救世軍の経験には、約10年後の日本での自由廃業運動につながる点を、いくつか見出すことができる。少女たちが売られて売春をさせられていること、また、救世軍が活動を開始すると周囲からの注目が集まったこと、そして、救世軍の活動を新聞が報じることによって警察を動かすことができたことが、その共通点である。また、救済所の中で、少女たちに生活費を得るための手段を身につけさせようとしている点も共通している。

このようなセイロンのコロンボにおける救世軍の経験について、インド全域の情報管理をイギリス救世軍代表として任されていたブラードは、知っていたと考えられる。また、1895年のイギリス救世軍の最初の来日の際、その後日本で長く活動することになる士官のニューカムはコロンボにおり、同地から乗船してロンドンから来た他の救世軍士官たちとともに日本へ向かったことが記録に残されているが、⁽⁴⁷⁾彼女もまた、コロンボでの情報を得ていたと考えられる。日本での婦人救済所の開設にあたっては、セイロン島での救済所設置の際に、ただそこに匿った少女たちを助け出しただけでなく、同地の救世軍が新聞を味方につけることによって世論を動かし、娼家を閉鎖させたという成功体験が意識されていた可能性が高い。なお、そのセイロン島の救済所についての記事の中に突如現れる「日本人やフランス人やドイツ人の女性たち」とは、同地で売春を行っていた女性たちのことであろう。日本では1880年代から外務省が日本人女性の「密売淫」を取り締まろうとしていたが、⁽⁴⁸⁾セイロン島のコロンボでも、日本人娼婦の存在が現地の人々に知られていたことがわかる。ブラードがこの『デリヴァラー』の記事自体を読んでいたか否かは不明であるが、1890年の日本の新聞ではインドでは日本人女性の売春が盛んであると報じられており、⁽⁴⁹⁾そのようなインド在住の日本人娼婦の存在についても、来日前から意識していた可能性がある。

ブラードの前任の司令官であったベリー大佐は、インドでの活動経験を持つブラードが次の日本の司令官になることに対して、非常に強い賛同の意を表した。ベリーは、イギリスへの帰国の途中にコロンボに立ち寄り、そこで次の司令官がブラードであることを知った。⁽⁵⁰⁾そのため彼は「溢るる喜びに満され」「このことについて、いかばかり、幸福に、また満足に感じたるかは、ほとんど筆紙につくしがたく候」と述べている。そのように彼が喜んだ理由は、ブラードがインドで最も長い成功体験を有しており、そのインドでの経験こそ「日本において最も有用」であるからだという。そして、そのような人物を適切に派遣したとして、ブース大将を賞賛している。⁽⁵¹⁾

イギリス本国では、日本で婦人救済所が設置される前年の1899年の時点で、ロンドンに10ヶ所の救済所があり、その他に、オールダーショット、プリストル、チャタム、カーディフ、グラスゴー、リヴァプール、マンチェスター、ニューキャッスル、プリマス、ポーツマスにも婦人救済所が設置されていた。⁽⁵²⁾そこでの救世軍の女性たちによるソーシャルワークについての情報は、主に『デリヴァラー』に記録されている。同誌は1889年7月に創刊された。『オール・

ザ・ワールド』とは異なり、特に国際的活動に焦点を当てたものではないが、日本を含め、イギリス救世軍の海外での活動についても紹介している。【図10】は、1901年10月の『デリヴァラー』に掲載された日本の婦人救済所の士官および入所者の写真である。日本におい



【図10】 'Girls of Our Tokio Rescue Home',
The Deliverer, October 1901, p. 57.

て婦人救済所がスムーズに運営され始めた背景には、それが開設されるよりもずっと前から、『閩聲』に掲載されたイギリス救世軍機関誌の翻訳記事を介して、日本の救世軍人たちが世界各地に広がる婦人救済所設置の情報に接していた事実⁽⁵³⁾がある。

日本での婦人救済所を実質的に担ったのは、山室機恵子だった（【図10】前列右から3人目）。その運営状況については、『ときのごゑ』等、日本側の史料に、数多くの記録が残されている。入所者数は、創設してから約半年間で28名であ⁽⁵⁴⁾る。入所した女性たちは、必ずしも自由廃業した元娼妓ばかりではなかった。最初に入所した女性は元酌婦である⁽⁵⁵⁾。また、28名中3名は救世軍人になり、その他にも数名が救世軍人になることを志願していた⁽⁵⁶⁾という。救世軍が日本に婦人救済所を開設した時、すでに日本では、WWCTUの影響のもとに矯風会が慈愛館という女性用の救済所を設置していた⁽⁵⁷⁾ため、矯風会に幹部として所属していた山室機恵子は、そこでの経験も救世軍の婦人救済所で活かしていた⁽⁵⁸⁾と考えられる。自由廃業運動の開始時に積極的に廃業後の娼妓や性的な問題に悩む女性たちを受け入れた救世軍の婦人救済所は、日本における女性支援活動の源流の一つであり、その設置は、日本の女性解放運動史の最も重要な出来事の一つとして位置付けられるべきである。

おわりに

本稿では、イギリスの救世軍万国本営による日本の自由廃業運動への最大の貢献が、婦人救済所の設置であったことを示した。当時の日本救世軍の司令官であったブラードは、前任地であるインドでの経験を活かし、その救済所の設置についての指令を出した。当時、インドの救世軍の管轄地域の一つであったセイロンのコロンボでは、日本での婦人救済所設置よりも10年以上前に、アジアで最初の婦人救済所を設置していた。そこで経験されたことは、後の日本で

の自由廃業運動にも通じる点が多く、ブラードは、そうしたコロンボでの経験を含むイギリス救世軍の世界各地における婦人救済所の前例を踏まえて、日本での計画を進めることになったと考えられる。

他方、イギリス救世軍が自由廃業運動時の法廷闘争の現場に関与しうるだけの十分な日本の情報を持つことができていなかったことも、本稿では同時に明らかにした。イギリス救世軍から海外に派遣される士官の中には、短期間で派遣地を移動する者も少なくなく、そのような状況のもとでは、現地の言語を十分に習得することは困難であった。日本に派遣されたイギリス人士官たちも、そのような言語の壁に悩まされていた。イギリス救世軍の機関誌における日本人女性の表象は、ジャポニズム的なステレオタイプに囚われており、表層的な理解にとどまっていた。日本に滞在していた士官たちを含め、イギリス救世軍は、日本の公娼制度の複雑な仕組みやその背後にある日本の家父長制的な家族観については、ほとんど理解できていなかったと推測される。

そのように、イギリス救世軍の側の自由廃業運動への関与には限界もあったが、その限界こそが日本人士官に自立を促した。イギリス救世軍の当時の日本理解の程度から推し量れば、自由廃業運動の際の日本各地の軍営における具体的な戦略は、日本の救世軍人たちが考え出したものとみなすことができる。日本では、イギリス救世軍からの情報に刺激を受けつつも、それぞれの現場においては日本人自身が対応策を考えるしかなかった。日英間の言語の壁は、結果的に、日本における救世軍の活動の自律性を高めることになったと考えられるのである。

先行研究では、自由廃業運動への救世軍の関与について、イギリス人を含む男性救世軍人の遊廓関係者との闘争に焦点が当てられることが多かった。しかし、廃業を望んだ娼妓たちにとっては、救世軍の男たちの闘争よりも、自分たちの廃業を認める法律と、廃業後の生活手段の確保が、より重要なことであったと考えられる。前者は救世軍ではなくマーフィの貢献に依るところが大きか

ったが、救世軍は後者のための場を用意したのである。イギリス救世軍による婦人救済所の設置は、そのように核心的な意義を持つ重要な出来事であった。

注

- (1) 「故「ヴィラアド」嬢追悼紀念会に於て（島田三郎君演説）」『婦人新報』第35号、1900年3月、18頁。以下、『婦人新報』からの引用にあたっては、不二出版の復刻版（1985年刊行）を使用した。なお本稿では、日本語文献の引用文中の歴史的仮名遣いは、読みやすさを考慮して、一部、現代仮名遣いに直し、句読点を適宜追加した。
- (2) 救世軍の信仰を持つ人々は、自らを救世軍人と名乗ったので、以下、本稿でも救世軍人と記載する。
- (3) 日本の内務省は、救世軍が自由廃業運動に積極的に関与し始める前から「基督教宣教師及其信者等」と遊廓との衝突が「外交上種々面倒を惹起」することを恐れていた。また、救世軍に対しては、後に日英同盟との関係が日本政府に強く意識されるようになった。拙著『性を管理する帝国—公娼制度下の「衛生」問題と廃娼運動』（大阪大学出版会、2017年）260頁、366-381頁、参照。
- (4) 原題はそれぞれ、*The War Cry*、*All the World*、*The Deliverer*、*The Officer* である。4誌とも、イギリス・ロンドンの救世軍国際遺産センターで原本を閲覧した。同センターの利用にあたって丁寧に案内して下さった同センターのスタッフの方々に、この場を借りてお礼を申し上げたい。
- (5) 日本の新聞や雑誌では、自由廃業運動が行われた当時、マーフィ（Murphy）を「モルフ」や「モルフィ」と記すことが多かったが、現在はマーフィと記載するのが一般的であることから、本稿でもマーフィと記すことにする。
- (6) 自由廃業運動の概要については、前掲『性を管理する帝国』第5章、参照。特に岡山県における自由廃業運動と救世軍の日英関係に言及したものとして、拙稿「山室軍平と廃娼運動—日英関係史の視点から」公益財団法人山陽放送学術文化財団編『慈愛と福祉 岡山の先駆者たち2』公益財団法人山陽放送学術文化財団、近刊、参照。
- (7) 'India', *All the World*, November 1884, p. 5.
- (8) *The Salvation Army Year Book for 1910*, London, The Salvation Army Book Department, 1910, p.69.
- (9) 'World's W.C.T.U.', *The Union Signal*, March 1, 1888.
- (10) 前掲『性を管理する帝国』106-118頁。
- (11) 日本における自由廃業運動の開始をめぐる国際関係についての先行研究は、日本では、救世軍に関するものは皆無であるが、マーフィ（モルフィ）についての研

- 究として、小川京子編『石つぶての中で—モルフィの廃娼運動』（不二出版、1984年）がある。日本の自由廃娼運動の東アジアにおける展開については、竹村民郎『竹村民郎著作集 I 廃娼運動』（三元社、2011年）参照。
- (12) ウィリヤム・ブース『軍令及軍律 兵士の巻』救世軍日本本営、1902年、153頁。
- (13) 後にイギリスで救世軍が出版した書籍に収録された山室機恵子の評伝においても、「その悪についての徹底的な研究の後で、ブラード司令官はその場所（遊廓）への進撃を決定した」と記されている（Mrs. Colonel Carpenter, 'The Late Mrs. Colonel Yamamuro', *Some Notable Officers of the Salvation Army*, London, Salvationist Publishing & Supplies Ltd, 1925, p. 116）。
- (14) *Outlines of Salvation Army History, Issued by Authority of the General*, London, Salvationist Publishing & Supplies Ltd, 1928, pp. 50-64. イギリス救世軍の“The Rescue Home for Women”は、日本における1900年7月の創設当初、「醜業婦救済所」と翻訳された。しかし、その日本での名称は、1901年6月に「婦人救済所」に変更され、1908年からは「婦人ホーム」になった。現在、“The Rescue Home for Women”は「女性救済所」または「女性のための救済ホーム」等と訳す方が適切であると考えられるが、日本での設立初期に「婦人救済所」と呼ばれていた歴史的経緯に鑑み、本稿では、同時期の他国における“The Rescue Home for Women”も「婦人救済所」と訳して統一して記載することとする。
- (15) Nozomi Harita, 'Japan Territory', *Historical Dictionary of the Salvation Army*, edited by Major John G. Merritt, The Scarecrow Press, 2006, p.309.
- (16) 日本での報道でしばしば使用された写真はヘンリー・ブラード編『救世軍戦争記』（救世軍本営、1901年）60頁に掲載されている。
- (17) 'Just in Passing', *All the World*, June 1898, p. 275. この記事は、1895年にイギリスから最初に来日したイギリス人士官たちのうちの一人であるパウエルが、インドでの活動を終えてイギリスに帰国した後に、過去の日記を元に、『オール・ザ・ワールド』の編集部が構成した文章である。
- (18) 同前。
- (19) 「救世軍近事」『関聲』1897年1月1日、3頁。以下、『関聲』および『ときのこと』からの引用にあたっては、不二出版の復刻版（1987-1989年刊行）を使用した。
- (20) 「救世軍近事」『関聲』1897年5月22日、3頁。
- (21) Commissioner Howard, 'Why an Exhibition?', *All the World*, July 1899, pp. 339-342.
- (22) 同前。
- (23) 同前。

- (24) 「血と火の旗影」『ときのこゑ』1899年9月15日、4頁。
- (25) 一例として、深い信仰を持っている日本人グループについて紹介した文章の見出しが‘Our Japs in India.’となっている記事がある（‘Advance of the Month’, *All the World*, November 1895, p. 279）。
- (26) ‘Rough Notes of Special Features in the Trade Section’, *The War Cry*, July 15, 1899, p. 15.
- (27) ‘Day-by-Day Programme for The First Week’ *The War Cry*, July 22, 1899, p. 7.
- (28) ‘Japanese Notes’, *All the World*, March 1896, p. 129.
- (29) ‘Japan’, *All the World*, May 1900, p. 302.
- (30) ‘Voices from Japan’, *All the World*, 1897, p. 466-468.
- (31) 同前、466頁。
- (32) 横浜写真がイギリス救世軍の機関誌の中で使用された例として、「地藏背負い」の写真（横浜開港資料館編『増補彩色アルバム 明治の日本—《横浜写真》の世界』有隣堂、1990年、193頁、所収）が『オール・ザ・ワールド』1904年10月号の559頁に転載された例や、F. ベアトの「患者の脈をとる医者」の写真（横浜開港資料館編『F. ベアト写真集 1 幕末日本の風景と人びと』明石書店、2006年、154頁、所収）が『オール・ザ・ワールド』1908年2月号の76頁に転載された例を挙げることができる。
- (33) U. G. Murphy, ‘The Woman Question in Japan’, *All the World*, July 1903, pp. 364-367.
- (34) ‘Daughters of Japan’, *All the World*, May 1906, pp. 243-246.
- (35) ‘Notes from the “Front”’, *The Officer*, November 1895, p. 324.
- (36) 前掲注(28)。
- (37) ‘Striking Story of a Japanese “War Cry”’, *The War Cry*, May 16, 1903, p. 6.
- (38) ‘International Notes, Japan’, *All the World*, September 1900, p. 557.
- (39) ‘Japan’s First Rescue Home’, *The Deliverer*, September 1900, p. 46.
- (40) Robert Sandall, *The History of the Salvation Army Vol. 3*, London, Thomas Nelson and Sons Ltd, 1955, pp. 11-12.
- (41) *Ibid.*, p. 12.
- (42) *Ibid.*, pp. 55-56.
- (43) Arch R. Wiggins, *The History of the Salvation Army Vol.4*, London, Thomas Nelson and Sons Ltd, 1964, p. 122.
- (44) 同前。
- (45) 前掲 *The History of the Salvation Army Vol. 3*, p. 57. 同書では、セイロンで1889年に女性救済所の活動が始まったとしているが、本文中に記したように、

『デリヴァラー』の1890年7月号（7月1日刊行）には「4ヶ月前、私たちは小さなホームを開設した」と記されている。

- (46) ‘Ceylon Rescue Work: A Letter from the Major’, *The Deliverer*, July 1890, p. 13.
- (47) ‘Notes from the “Front”’, *The Officer*, August 1895, p. 232.
- (48) 前掲『性を管理する帝国』127-140頁。
- (49) 「密航露頭の娘13人」『東京朝日新聞』1890年11月29日4面。同記事は、インドで「日本の淫売女が盛んに行」われていると報じている。
- (50) 「バリー大佐の消息」『ときのごゑ』1900年3月1日、2頁。
- (51) 同前。
- (52) *Wounded in the Warfare of Life: Being a Report of the Annual Meeting of the Women’s Social Work of the Salvation Army*, London, Headquarters of the Women’s Social Work: Salvation Army Press, 1900, pp. 36-37.
- (53) たとえば、アメリカでの動きを報じた短い報告として「婦人救済院」（『ときのごゑ』1898年2月15日、4頁）、イギリスでの女性救済所についてのプラムウェル・ブース夫人の演説を紹介したものとして「醜業婦救済の事」（『ときのごゑ』1899年7月15日、4頁）等がある。
- (54) 前掲『救世軍戦争記』72頁。
- (55) 同書、74頁。
- (56) 同書、77頁。
- (57) 社会福祉法人慈愛会編『慈愛寮百年のあゆみ』ドメス出版、1994年、13-75頁。
- (58) 1899年4月4日の婦人矯風会中央部第6回記念会には、矯風会の軍人慰問課の代表として佐藤（山室）機恵子が出席したが、同席していた潮田千勢子が慈愛館について発言し、慈愛館の有効利用策として「妻君養成所」または「子守下婢養成所」の機能を持たせるようにと提案した。特に後者の場合、入館者が収入を得たり貯金したりすることができるようになるのではないかと潮田は論じている（『婦人新報』第24号、1899年4月、14-16頁）。女性用の救済所を「下婢」すなわち女中の養成所と兼ねるという案は、救世軍によっても採用されることになった。1900年4月の時点で慈愛館の入館者は11名であり、その入館者たちには「読書算術等の初步に習熟」させる予定であると報告されている（『婦人新報』第36号、1900年4月、26頁）。

* 本研究は JSPS 科研費 JP15K01917, JP18K11898 の助成を受けたものです。

(第20期第1研究会による成果)